

東北タイ農村における女性の「出稼ぎ」と母役割

——送り出し地域からみたグローバル化時代の移動の動態

木曾恵子

はじめに

本特集で扱う「ミクロ・リージョン」は、ある特定の歴史文化的状況のなかで移動を引き起こし、その移動を支える仕組みの基盤となる家族の構造を共有する場として定義することも可能な概念であろう。本稿では、ミクロ・リージョンを上記のように位置づける事例として、過去約四〇

年にわたって労働者を送り出し続けてきた東北タイ農村における女性の「出稼ぎ」^{*}を検討する。そのことによって、恒常的に労働者を送り出し続ける農村地域の動態を明らか

にし、そこに内包される家族の実態を通して、ミクロ・リージョンのメカニズムを考察する。具体的には、一九九〇年前後以降の既婚女性、および子を持つ女性の「出稼ぎ」が、彼女らの労働経験の上に選択される行為であると同時に、母親や姉妹と母役割を分担することで移動が支えられ続けてきたことを明らかにする。

本稿で対象とする今日の東北タイ農村は、国内外への労働者の主要な送り出し地域である。第一次ピブーン政権（一九三八―四二年）による経済タイ化政策以降、中国系移民のかわりにバンコク首都圏の主要な労働力となったのは、東北タイ農村を中心とする地方農村出身男性であった（Adul 1960; Tector 1961; Meinke 1962）。また一九六〇

年代から一九八〇年代にかけてタイ経済の急成長を支えた主要な労働力は、バンコク首都圏を中心に労働集約的な多国籍企業の下請け工場で働く地方農村出身の若年女性たちであった (Pawadee 1982; Suwanlee 1984; Heyzer 1986; Mills 1999)。

経済のグローバル化を受けた「労働力の女性化」「移動の女性化」という現象は、タイだけではなく他の東南アジア諸国やラテンアメリカ諸国を中心に、いわゆる途上国各地で起こった現象である。近年では家事労働者やケア労働者、あるいは国際結婚などトランスナショナルな移動をする女性たちが増加し、東南アジア女性が世界システムへと巻き込まれていくプロセスや構造、国境を越えてもなお維持されるネットワークなどに注目が集まっている (Parreñas 2005; Patcharin et al. 2007)。

ただしこうしたトランスナショナルな動きと並行して、多民族が暮らす国内で、よりよい生活を求めて文化的越境を繰り返す女性たちも後を絶たない。タイでは地方農村からバンコク首都圏を中心とする都市への「出稼ぎ」や移住は、ますます恒常化した現象となっている。統計がないので具体的な数字を提示することはできないが、二〇〇〇年の人口センサスに基づく首都バンコクと東北タイの人口ピラミッドを比べてみると、東北タイの人口ピラミッドは二〇～三四歳までの割合が低く、一〇～一九歳、三〇～

四〇歳の割合が高くなっている。一方、バンコクの人口ピラミッドは、二〇～三四歳までの割合が高い (Samnangkarn Sathin haeng Chart 2000)。つまりバンコクが、東北タイを含む地方農村から若年者を吸収しているのである。

また近年のタイでは、工業化の発展にもかかわらず、家族形態が先進国とは逆の変化をしていることが指摘され始めている。すなわち核家族化が進むのではなく、タイ全土においてより複雑な親族成員を含む複合家族の形態が増加している。人口センサスに基づいて東北地域とバンコク首都圏における家族形態の変化をみると、両地域においてとくに一九九〇年代以降、複合家族の形態が増加している (竹内 2009: 184)。その要因のひとつとして、女性たちが結婚や出産を経た後も「出稼ぎ」を継続していたり、出身村に帰省して出産した後、母親に子を預けて再び「出稼ぎ」をしたりするようになり、子育てをめぐって家族形態の変化が起こっていることを指摘できる (木曾 2007: 69-72)。

しかしタイ女性の「出稼ぎ」や都市への移住など移動労働を扱ったこれまでの人類学的研究では、おもに若年女性の移動をめぐる葛藤や移動先での生活に重点が置かれてきた。一九八〇年代の東北タイ農村出身の若年女性労働者の調査からは、農村社会の規範における娘としての義務と都市生活を享受する自律的な近代的自己イメージとの間で、若年女性が葛藤する様子が報告されている (Mills 1999)。

現在では若年女性の移動労働は娘としての規範自体が揺れ動いてはいるものの、彼女らのライフコースのなかに組み込まれた行為となっている。ところが子を持つ女性の移動をめぐる問題は、政策面で移動者と子育ての問題が重要な論点になっているにもかかわらず（江藤 2009）、移動者の視点から具体的な事例に基づいた研究はなされていない。

そこで本稿では、移動者のライフコースのなかで「出稼ぎ」を捉え、移動者自身が家族との関係のなかで移動を選択し、実践する移動のメカニズムを明らかにしたい。その際、女性の移動をめぐる行為や経験を一元化せずに描くことを目指す。タイ女性の移動を扱った先行研究では、女性の移動をめぐる行為や経験を上座仏教的価値観における母娘役割を遂行するための行為として還元主義的に説明してしまうことと（Pasuk 1983; Muecke 1984; Mills 1999）、上座仏教社会の再生産者としての女性の移動労働を一元化してしまっている。こうした視点を突き進めることは、異なる時代、地域における「女性労働」を一元化し、過去約四〇年にわたって労働者を送り出し続けてきた地域特有の変化を見落としてしまう可能性も含んでいる。したがって、移動者自身のライフコースにおける移動の論理に基づく地域の生成をミクロ・リージョンと捉える本稿の視点は、労働者の送り出し地域として静かな東北タイ農村を描いてしまう危険性を回避する試みでもある。

Ⅰ 東北タイ農村における移動とジェンダー

タイで労働力の女性化がみられるようになったのは、一九七〇年前後以降のことである。政府が第一次経済開発計画（一九六一〜六六年）によって工業化を本格的に開始し、バンコク首都圏（ノンタブリー、パトムターニー、ナコンパトム、ラーチャブリ、チョンブリ、サムットサコン、サムットプラカーンの各県）に世界市場向け製品生産工場が新設され、労働人口の集中が起こったためである（渡辺 1988: 364）。このような多国籍企業主導の労働市場で求められた労働力の多くが、手先が器用とされ、夫や子どもに対する責任や制約もまだない未婚者を中心とする若年女性であった。そしてその多くが地方農村出身者であり、低学歴で技術を持たない彼女らは低賃金で雇われた。一九七八年の調査によると、当時のバンコク首都圏における製造業とサービス業に従事する女性の数は、男性の二倍になっており、女性の半数以上が東北タイ農村出身者であったという報告もなされている（Pawadee 1982: 305）。以下ではまず、東北タイ農村における移動の背景を簡単に説明する。

1 開拓移住から「出稼ぎ」へ

東北タイはメコン河を境にラオス、カンボジアと国境を接するタイ東北部に位置する一九県である(図1)。

二〇〇〇年の人口センサスによれば、この地域にはタイ全体の人口の三分の一に相当する二千万人以上の人々が暮らしており (Samakngan Sathiti haeng Chart 2000)、その最大の言語集団はタイ語族のラオ (Lao) である。^{*2} 一八世紀頃から入植し始めたといわれる後続の移住者であるラオの人々は、^{*3} ビエンチャンからチャンパーサックへ南下し、チー川沿いにウボンラーチャタニー、ローイエット、マハーサラカム、コーンケン、ウドンタニ、ルーイへと北西へ向かって水稲耕作に従事しながら、二〇世紀前半までよりよい水田を探すための開拓移住を繰り返してきた(林 2000: 88)。本稿が対象とするのはラオの人々であり、調査地であるマハーサラカム県ナーチュアック郡C村は、上記の開拓ルート上に位置している。

開拓移住を繰り返して形成されたラオの人々は、結婚後少なくとも数年間は妻方居住を行い、女性を通して農地や屋敷地などの土地を継承していくという慣習をもって集落に定着してきた (Tambiah 1970: 12)。その結果、以下のような姉妹を軸にした家族周期が理念型として想定されて

いる。夫婦はまず妻の実家で妻の両親やキョウダイと同居し、米の生産と消費を共同する。しかし子の誕生や妹の結婚に伴う新夫婦の同居を契機に、先に結婚した娘夫婦は同屋敷地内に別棟を建設し、独立した家屋を築く。この段階でも米の生産と消費は、親世帯と共同したままのことが多い。そして最後に残った末娘夫婦が両親と同居を続け、姉妹で分配する両親の土地の多くを受け継ぎ、両親の最後の世話をするように期待される。一九六四年に日本人として初めて東北タイ農村で調査を実施した水野は、こうした同屋敷地内で妻方居住をする親子世帯、姉妹世帯が、親の所有する農地での米の生産と消費の共同を行っている点に注目し、これを「屋敷地共住集団／結合」(multihousehold compounds)と呼んだ(水野 1981: 109)。

このように夫婦や親子、キョウダイ関係にある者が中心に同居する家屋はヒアン (hian) と呼ばれる。親と同居している娘夫婦とその子は、親のヒアンの成員である。しかし同屋敷地内でも異なる家屋に住む夫婦は、独立したひとつのヒアンである。本稿では、このヒアンを世帯と呼ぶ。

世帯は東北タイ農村でもっとも基本的な経済単位であると同時に、結婚式や葬式の際の布施金、村落積立金などの収集単位でもあり、集合的年中仏教儀礼の際にはこの世帯単位で代表者(おもに年配女性)が儀礼に参加する。また家族周期のなかで同時代的に同世帯に居住する人々は、「家

屋を同じく」(hian diao kan) する者と表現され、より親密な関係にある近親者として認識されている。この家屋を同じくする人々は、住民自身や政策によってしばしば標準タイ語の「家族」(khrap khrua) にも置き換えられる。

ところがラオの人々にとって生活実践の一部であった開拓移住による移動は、徐々に減少していった。人口増加とともに稲作に適した土地が減少し、土地の値段も高価になり、ついには開墾できる未耕地がなくなっていたためである(林 2000: 92)。また同時期に、産業化に伴い首都バンコク周辺で労働市場が拡大した結果、東北タイ農村からもより多くの人々が、現金獲得のために首都バンコクを目指すようになった。^{*4}

東北タイ農村、とくにラオの人々にとって「出稼ぎ」は、かつての開拓移住の延長線上にある行為のひとつであると同時に、それとはまったく異なるレベルでより多くの人々が、より多層な社会関係や差異と交錯する契機となった重要な出来事のひとつでもあった。たとえばマハーサラカム県の農村で調査を行ったカイズは、一九六〇年前後の東北タイ農村の人々はバンコクで「出稼ぎ」労働者として中央タイの人々と相互関係を持つことで、初めて東北タイ出身者としての自己認識を高めるようになったと述べてい



図1 タイ全土と東北タイ地域における調査地

る。「出稼ぎ」を経験したことがない者(とくに女性)が、近隣村の些細な方言や慣習の差異に基づいて自らの地域文化を提示するのに対し、「出稼ぎ」経験者は中央タイの人々との交渉のなかで、中央タイに対する東北タイ農村地域としての地域主義(localism)を形成していた(Keyes 1966: 364-366)。カイズの分析にも示されているように、一九七〇年代前後まで、東北タイ農村の文脈では、女性が村を離れて働きに行くという行為はほとんどみられなかった。なぜなのだろうか。

2 新しい出来事としての女性の「出稼ぎ」

開拓移住によって集落を形成し、妻方居住と女性を通して土地の継承という慣習のなかで、移動を繰り返すのはもっぱら男性であった。かつては開拓移住以外にも日常実践のなかで人々が村を越えて移動するという行為はよくみられたが、個人としての越境行為は男性性と強く結びついた文化的行為であった。たとえば妻となる女性を探す嫁探しや出家後の僧侶としての巡歴、行商人としての移動などがあった。これらの移動は物見遊山の行為であると同時に、婚出や出家によって近親者や俗社会との関係がいったんは断絶される行為でもあり、社会的地位の移動という要素も含んでいた (Kirsch 1966: 370-378)。

一九五〇年前後からみられるようになった東北タイ農村男性の「出稼ぎ」は、こうした慣習的な移動の延長線上に位置づけられる。プータイの村で調査をしたカーシユによれば、同地の「出稼ぎ」は広く経済活動としても捉えることができるが、経済的要因のみでは説明することができない。彼らは貧困による不安に駆られてのみ村を離れるのではなく、物見遊山の要素から村を飛び出し、移動の経験を通して社会的地位を獲得し、より広い社会関係を結んでいたからである (Kirsch 1966: 377)。また林は男性の移

動を、「いずれも『いいかへどかける (pai thiao)』とていう日常語で表現される、いくらか無目的な行動の延長にある」とし、ラオ男性に特徴的な行動としている (林 2000: 116)。

その一方で女性の日常生活にとっても移動が慣習的行為だったのかといえば、決してそうではない。女性は村近隣での農業や養蚕・機織、行商などの経済活動を基盤として子どもや両親の世話、家計の管理、あるいは世帯の代表者としての寺院への布施、仏教年中儀礼へ参加し、各世帯と集落全体の生活を円滑につなぐ役割を担う存在であると考えられてきた。つまり移動が慣習化していた男性に対して、女性が単身で村外に出て行くことは決して生活実践のひとつではなかったのである。むしろ女性には、村内でさえ「一人で歩くべきではない」という行動規制が働いていた (江藤 1996: 158)。たとえばカイズは、女性を「移動しない人々」(immobile villagers)と記し、一九六三年当時のマハーサラカム県では「村の外に出て行ったことのない者の大部分は女性である」と述べている (Keyes 1966: 364)。筆者が調査をしたC村でも少なくとも一九九〇年代前半頃までは、依然として「出稼ぎ」以外の場面では女性の移動への規制が強くみられていた (木曾 2007: 68)。

しかしこのような行動規制があったなかで、実際には一九七〇年代以降、東北タイ農村からも若年女性がバンコ

ク首都圏へ単身で働きに出て行くようになった。かつて女性の行動規制の根拠として人々の間で強調されていたのは、「僧侶となる息子を育てる」「老後の世話をすることによって両親に対して功德を積む」というような、仏教規範に基づく娘や母としての役割であった (Keyes 1984: 229)。それは女性の「出稼ぎ」が増大していくなかで、未婚女性のセクシャリティを守るための行動規制の根拠となっていたと同時に、村を離れて「女性が働く」ことを正当化する理由にもなっていたのである。

Ⅱ C村における「出稼ぎ」の展開

これまでみてきた東北タイ農村における移動の流れをふまえて、以下では二〇〇四～二〇〇六年にかけてマハーサラカム県ナーチュアック郡C村で行った定着調査によって得られたデータをもとに、世帯のなかでどのように「出稼ぎ」が展開されてきたのかをみていこう。^{*}

マハーサラカム県ナーチュアック郡C村へは、首都バンコクから東北へ約四四〇km、長距離バスで約七時間かかる。C村は天水依存水稻耕作を主生業とし、二〇〇五年現在で一七五世帯、人口五九七人で、東北タイ中央部から南部に広がる立木が点在した広大な水田地帯に位置するラオの農

村である。しかしナーチュアック郡には広大な水田地帯をもたらず主要河川であるチー川やムーン川、およびそのどちらの支流も流れ込んでおらず、周辺には畦を高く盛り上げた天水田が広がっている。かつてC村の生業は、自給自足的な天水田稲作や狩猟採集活動が主流であった。しかし市場経済化が顕著である他の東北タイ農村と同様に、C村の生業形態も変化してきている。二〇〇五年現在、稲作のみに従事しているのは村内の一五歳以上の非就学者の約一五%にすぎず、その他多くの人々が農産物の換金活動やその他現金獲得活動にも従事している。ただしC村の人々が、稲作を放棄して現金獲得活動に従事しているわけでは決していない。稲作を主軸とした上で、換金作物栽培や絹糸生産など現金獲得活動に従事する者は、約六六%を占める。これに稲作を主軸として雇用労働に従事している者も加えると、約八六%の人々が何らかの形で稲作に従事していることになる。つまり現在のC村では、稲作を主軸とした上で農作物の換金活動が主流化し、その他現金獲得活動を希望する人々が増えている。

1 家族周期にみる「出稼ぎ」

以下では、前述した東北タイ農村の理想的な家族周期のなかで、世帯員の「出稼ぎ」がどのように展開されていっ

たのかをみてみたい。

事例 1

世帯Lには二〇〇五年現在、五〇代のDと三女夫婦、三女の長男と長女、Dの四男の長女の六人が暮らしている。

Dは母親から相続したC村集落のほぼ中央に位置する屋敷地と家屋に、かつてはC村出身の両親と兄と四人で暮らしていたが、兄がウドンタニ県に婚出した後の一九六四年頃にC村出身の男性と結婚し、夫が同居することになった。

Dは両親の死後も、夫と八人の子と世帯Lの同家屋で暮らし続けた。ただし一九七九年頃に最初の夫が死亡し、翌年、C村出身の別の男性と再婚した。その後もDは同家屋で暮らし、一九八三年に二番目の夫との間に娘を一人もうけた。現在はDが母親から譲り受けた土地で自給用のモチ米とウルチ米を生産するほか、畑でユーカーを栽培して約二千バーツ／年の収入を得ている。^{＊*}また三女の夫が乗り合いバスで毎朝夕郡都までの送り迎えを行ったり、自宅で自転車やバイクの修理を行ったりして、約六千〜一万バーツ／月の現金収入を得ている。さらに四男夫妻からミルク代として約二千バーツ／月の仕送りと、不定期ではあるが現在バンコクで働く五女からの仕送りによる収入がある。

Dの四人の息子は長男から順に移出、婚出し、現在世帯Lで暮らしている者はいない。長男は幼少のころから北部

パヤオ県の近親者へ預けられた後に軍人となり、現在は結婚してサラブリー県で暮らしている。次男は中学卒業後にバンコクに働きに出て結婚し、現在はコーンケン県の妻の実家で農業に従事している。婚出した長男と次男は年末年始や四月のタイ正月に妻や子どもたちと世帯Lを訪れる程度で、日常的に送金などの経済的なやりとりはほとんどない。Dが再婚して長男と次男も村を出た後の一九八〇年代前半、Dの夫がマンゴー栽培の失敗から借金を背負った。その借金を返済するため、一九八三年に小学校四年卒の長女がバンコク西部のラーチャブリー県の縫製工場で約一年間働いた。この長女の「出稼ぎ」による現金収入は借金返済に充てられただけではなく、生活費と三男の職業訓練学校の資金、家屋の改築費用になった。三男は小学校卒業後、長女の「出稼ぎ」による資金をもとにバンコクの職業訓練学校で学び、その後バンコクの宝石加工工場で数年間働いた。後にC村出身の女性と結婚し、同村内の妻の両親の屋敷地内に家屋を構えた。四男は小学校を卒業してすぐに見習僧として出家し、還俗した後、バンコクへ働きに出た。現在はウボンラーチャタニー県出身の女性と結婚し、将来的に妻の実家に構える予定の家屋建設費用を貯蓄するため、長女を世帯Lに預けてバンコクで働いている。

息子たちが次々に移出していくのに対し、世帯Lに残ったのは、幼くして死亡した次女を除く娘たちであった。長

女は一九八八年にC村出身の男性と結婚し、夫とともに両親と妹たちと同居を始めた。この時期に小学校六年卒の三女が、サムットプラカーン県へ働きに出た。長女夫婦は第一子出産後の一九九四年、世帯Lから少し離れたところに土地を購入して独立した家屋を構えた。その結果、世帯LにはD夫婦、四女、五女の四人が残った。Dの夫が病気で死亡した一九九七年、バンコクで働いていた三女がレイオフ勧告を受けてC村に帰郷した。同年、三女の仕送りを資金に高校を卒業した四女が、サラブリー県の短大に進学するために村を出た。また三女、および三女の夫の仕送りを資金に高校を卒業した五女も、二〇〇一年に大学進学のため村を出て、世帯LにはDと三女夫妻、三女の第一子、第二子が残った。

以上のような世帯Lの事例からは第一に、兄弟がバンコク首都圏で働いている時期が重なっているのに対して、姉妹の「出稼ぎ」の時期は重なっていないことがわかる。長女が「出稼ぎ」をしている間は妹たちが、三女が「出稼ぎ」をしている間は長女と四女、五女が残っていた。長女が独立した世帯を構えた後も、三女が村に戻るまで四女が五女のどちらかが母親とともにC村で暮らしていた。将来的に婚出する立場である兄弟が次々に村を出て行くのに対して、姉妹は家族周期のなかで少なくとも誰か一人以上が

母親と同居している状態が常に保たれていた。

第二に、兄弟よりも姉妹の方に仕送りや村の世帯で暮らすことへの期待がなされていた。聞き取りの限りでは、村の外で働いていた兄弟からは、とくに自主的な仕送りはなかった。それに比べて「出稼ぎ」をしていた長女や三女は自主的、かつ定期的に仕送りをしており、その現金は父の借金返済や家屋の改築、弟妹の学費、世帯員の生活費、農業関連費などに使われていた。多くの先行研究でも論じられてきたように、男性よりも女性の方に仕送りの期待がなされていた (Peauk 1982; Mills 1999)。

また土地の分配に目を向けてみると、Dは子ども全員に約一六〇〇㎡の畑を一区画ずつ、娘たちには同様に水田を四区画ずつ分配した。実際に分配された土地を使用しているのは、現在は独立した世帯をC村内で構えている長女だけある。世帯Lでは分配した土地以外にDが約三三〇〇㎡の畑を所有し、子どもたちに分配した分と合わせて自給用の野菜栽培や、牛飼育をしている。また現在は四女と五女、同居する三女に分配した水田で、三女と二人で自給用のモチ米とウルチ米を栽培している。

このようにかつて行動規制がみられた女性の移動が恒常化している現在でも、一九六〇年代初頭の状況を基に概念化された稲作を基盤にした家族周期モデルは、ひとつの理念型としてC村内に生きている。それは「出稼ぎ」をした

女性たちの多くが村に戻って結婚し、稲作に従事しながら子どもや両親の世話、あるいは世帯の代表者として寺院への布施や仏教年中儀礼へ参加するなど、東北タイ農村社会の再生産に関わる行為に変わらずに携わってきたからである。

2 帰郷と再「出稼ぎ」の選択

それでは「出稼ぎ」をした人々のうち、どれくらいの人々が帰郷しているのだろうか。以下ではまず、二〇〇五年現在のC村出身の居住世帯主夫婦、およびそのキョウダイ、子を対象とした全戸調査から得られたデータをもとにC村出身者の帰郷状況についてみてみよう。一九六〇年代から現在まで男性は帰郷していない人数の方が多いが、女性は一九九〇年代までは大部分が帰郷していた。ところが一九九〇年代以降は、「出稼ぎ」をする人数が一気に増加したのにつれ、約八三%が帰郷せずに結婚後も移動先で暮らし続けたり、あるいは未婚のまま働き続けたりしている。

このような女性の再「出稼ぎ」に目を向けてみると、一九七〇年代に「出稼ぎ」をして現在はC村に居住する八人全員が結婚後は村外に働きに出ていないのに対し、一九八〇年代では約四八%、一九九〇年代では約五三%

が結婚後も村外で働いた経験を持っていた。また二〇〇五年現在には女性「出稼ぎ」者の約八〇%以上が既婚者であり、さらにその約八〇%以上が子を持つ女性となっている（木曾 2007: 33）。

それでは既婚女性や子を持つ女性たちは、どのような状況のなかで再「出稼ぎ」をしているのだろうか。以下では、C村在住の二〇〜五〇代の移動経験者に対して行った聞き取り調査によって得られたデータをもとに、女性の再「出稼ぎ」の事例をみてみよう。

事例2

Wは四人キョウダイの長女として生まれ、現在は父親が所有する土地で両親とともに自給用の稲作を生業としている。加えて積極的に村近隣でのキャッサバや牧草の収穫、家の新築や改築などの日雇い労働、住民組織の活動に参加しながら、両親の屋敷地内に家屋を分けて長女、長男と暮らしている。夫は現在、台湾へ二度目の「出稼ぎ」に行っている。Wは一九八六年に小学校六年を卒業後すぐ、すでに働きに出ていたC村出身の友人を訪ねて、他の友人らとバスに乗ってバンコクへと向かった。バンコクで暮らし始めた当初は友人に紹介してもらった縫製工場や家事労働などの職を転々とした。年に二回の帰省時には弟妹の学費として、母親にそのつど数千バーツを手渡ししていた。Wが手

渡した現金は弟妹の学費以外にも、家屋の新築や改築費用の一部に加えて、実家のテレビや冷蔵庫、洗濯機などの耐久消費財の購入にも充てられた。一八歳のとき、C村出身の二〇歳の男性との間に第一子を妊娠し、結婚した。妊娠発覚後も縫製工場で勤め続け、第一子出産のために一時的に村に帰省したが、出産後は子を実母に預けて再び夫が働くバンコクへ戻った。縫製工場で働きながら、離れて暮らす実子の粉ミルク代となる養育費をほぼ毎月、母親に送り続けた。二二歳のとき、第二子を妊娠。第一子出産時と同様、出産のために村に帰省するも、やはり出産後は二人の子を母親に預けて再びバンコクで夫と働いて養育費を送り続けた。しかし二九歳のとき、夫が台湾へ「出稼ぎ」をしたのを契機に、Wは村へ戻った。「もうバンコクに働きに行く気はないのか」という筆者の質問に対して、Wは以下のように語った。

「バンコクで働くのは疲れるから。一〇年以上も夫婦で一緒にバンコクで働いて、自分たちが住む家を建てた。今は夫が稼いでくれるから、私はもうバンコクへ働きに行く必要がない。でも、(夫が台湾に働きに行くための)まだ借金は残っているから、お金は稼ぎたい」(二〇〇五年九月一六日)。

事例3

現在Sは夫と長女、長男とC村で暮らしている。隣村出身のSは、第一子の出産までは夫とともに実家で暮らしていたが、出産を契機に夫の近親者からC村にある土地を購入して独立した屋敷を構えた。夫が水田を相続していないために、C村に移住後も実母の水田で自給用の稲作を共同している。それに加えて村近隣での田植えや稲刈り、家の新築や改築などの日雇い労働にも積極的に参加している。Sは小学校四年卒業後、近親者とともにサムットプラカーン県の食品工場に働きに行った。数年間働いた後に帰郷し、働きに出る以前から顔見知りであったC村出身の男性と結婚した。第二子出産後、Sは夫と二人の子を残して、一人で未婚時代に働いていたサムットプラカーン県の食品工場へ再び働きに行った。Sが一人で働きに行くことに関して、夫は賛成ではなかったものの、反対もしなかったという。Sはその理由を、以下のように語った。

「売れるほどの米が毎年収穫できるわけでもないし、夫は田んぼや牛追いはよくできるのだけど、稼ぐ術を知らない。私たちは貧乏人なのよ。子どもたちが大きくなっても、お金がなくて勉強させられない。私たちがみたくに貧乏にはさせたくないから、勉強させたいのに」

(二〇〇四年二月二七日)。

しかしSは約三ヵ月後に、「出稼ぎ」から帰郷した。S自身も当時三歳の長男が恋しかったのと同時に、夫が一人で子どもの食事や日常生活の世話をしていることが不安でたまらなかったという。「あんなに心配になるなら、もう子どもを置いて働きに行くのは懲り懲り」「村で現金を稼ぐことができる仕事を探したい」とSは語っていた。

このように女性が結婚や出産後に再「出稼ぎ」をする場合、夫を残して自分だけが「出稼ぎ」をすることはほとんどない。事例2のWのように夫と「出稼ぎ」をするか、夫が「出稼ぎ」をする場合には自分は村に戻っていた。その上で子を預けて再「出稼ぎ」をする場合、女性たちを支えるのは同家屋内に住む母親であった。協力できる母親がない場合は、事例3のSのように再「出稼ぎ」をするのが困難であることを指摘できるだろう。

Ⅲ 女性の再「出稼ぎ」を支える孫育て

以下では、C村に在住する両親に子どもを預けて「出稼ぎ」をしている女性とその家族に対して行った聞き取り調査に基づき、東北タイ農村における「孫育て」(living lan)について考えてみたい。それによって移動する女性

たちが、子育てをめぐってどのような合意や交渉を行っているのかを明らかにする。

孫育てとは、「出稼ぎ」をする女性に代わって両親が村で孫を預かり、周囲の人々と協力しながら養育することであり、過去約四〇年に及ぶ女性による「出稼ぎ」が東北タイ農村にもたらした現代的現象のひとつである。

1 孫育ての条件

二〇〇五年のC村の世帯構成をみると、C村では全一七五世帯中、核家族が一〇二世帯(五八%)と最も多い。それに次ぐのが二世帯同居家族で二七世帯(一五%)あり、続いて三世帯同居家族が一八世帯(一〇%)、隔世代同居家族が一八世帯(一〇%)となっている。そのなかで二世帯や三世帯同居家族、隔世代同居家族の各世帯における親と同居する子の内訳をみると、娘(あるいは娘の子)が両親(あるいは祖父母)と同居している妻方居住の例が七六%と圧倒的に多い。この隔世代同居家族が、孫育て世帯である。

事例4

現在二九歳のKは六人キョウダイの五番目としてC村に生まれた。小学校四年を卒業後、二人の姉を追って友人と

ともにバンコクへ向かった。バンコクでは姉と暮らしながら、小規模店舗の店員や工場労働などの職を転々としていた。一八歳のときにバンコクで出会った男性と結婚して三人の娘をもうけ、三人目を出産した後、C村へ帰郷した。しかし帰郷後ほどなくして、バンコクで建設作業員として働いていた夫が事故死してしまった。夫の死後、Kは母親に三人の娘を預けて、夫が務めていた建設会社で事務員として働き始めた。

「村で暮らし続けてもよかったのかもしれないけれど、子どもの将来を考えるとやっぱりお金が必要だと思った。今までは夫が仕送りしてくれていたけれど、これから子どもたちが一人ずつ高校や大学に行くたびに、（婚出した）姉や弟にお金を無心するわけにはいかない。うちには私しかお金を稼げる人がいなくなったの。うちには田んぼもないし、私が働かなければいけなかったのよ」（二〇〇五年七月八日）。

このように妻型居住を理想とする東北タイ農村において、母方祖父母が子を預かるのは何ら特異な現象ではない。女性が結婚後も実の両親と暮らすなかで、「出稼ぎ」に行かなくとも母方祖父母が孫と同居するのは当然であった。こうした社会構造的基盤があったからこそ、労働力の

女性化が進むタイにおいて、事例2や事例4のように東北タイ農村の女性たちは実の両親に子を預けて「出稼ぎ」をすることができたといえるだろう。とくに事例4のKのように、夫と死別、あるいは離婚し、老親と娘、孫のみの世帯の場合は、重労働である稲作を行うのも困難であり、娘が「出稼ぎ」をして現金収入を得ることが期待される。同時に女性自身も娘、あるいは母役割のなかで、自らを稼ぎ手として強く認識するようになる。

また隔世代同居家族一八世帯のうち一七世帯が娘の子と同居をしているなかで、息子の子と同居しているのは事例1のDのみである。Dはその理由を、以下のように説明する。

事例5

「本当はN（四男の妻）の母親が面倒をみるべき。だけれど彼女の母親は若いころバンコクで働きすぎて足を悪くしてしまった。もともと心臓も悪かった。妹もいるけどまだ中学生だから。あの家じゃとてもじゃないけど面倒をみきれないよ。うちにはまだ小さい子（三女の長女、当時一歳）がいるからね。三女もいるし、うちに来た方がよかったのだよ」（二〇〇四年一〇月一七日）。

Nは小学校四年を卒業後、すぐに母親とともにバンコクで暮らし始めた。二七歳のときに結婚し、出産した後も縫製工場で働き続け、現在は約八千バーツ／月の収入を得ている。当初、Nは母親をバンコクに呼び寄せて長女の面倒をみてもらうつもりでいた。しかし体調のすぐれない母親が難色を示したため、代わりに夫がDにバンコクでの同居を打診した。しかしDはバンコクでの生活に不安を抱いており、四男夫婦と母親たちの四者による携帯電話を通じた話し合いの末、Nの長女はC村でDが預かることになった。

このように妻方であれ夫方であれ、母親の存在は、女性の再「出稼ぎ」にとって重要な条件のひとつである。幼い



写真1 生後3か月の孫の世話をする祖母。乳児の母親（娘）は、バンコクで工場労働者として働いている

子を持つ女性が死亡した場合には、代わりに女性の姉妹がその子を引き取るという行為もみられる。しかし母親と同居していない姉妹が、甥姪を預かるという事例はほとんどない。あくまで孫育ての責任を負っているのは、再「出稼ぎ」をする女性の母親なのである。孫育て世帯では、訪問者がよく冗談で「この子はどこの子?」「育てているのは誰?」(phu dai phu liang)などと声をかける。こうした問いに対する答えは必ず、預けられる子にとっての祖母である。

2 孫育てをめぐる母役割の両義性

これまでみてきたように、母親がいない女性が子を村に残して「出稼ぎ」をすることはほとんどない。それは孫を預かり育てているのは、預けられる子にとっての祖母と語られることから明らかだろう。それでは日常生活において、祖母のみが孫育てに携わっているのかというと必ずしもそうではない。ここでは事例1と5で取り上げた世帯Lを例にあげてみてみよう。

事例6

世帯Lでは二〇〇四年一〇月から、四男の長女（当時生後三ヵ月）を預かっている。同世帯に暮らす者は直接的で

あれ、間接的であれ、四男の長女の養育に関わっていたといわねばならないが、ここでは直接的、なおかつ日常的に赤ん坊の身の回りの世話を行っていた人々について考えてみたい。ここでいう身の回りの世話とは乳幼児に対する授乳や食事、排泄、水浴び、午睡や睡眠をさせること、および躾や教育である。

四男の長女の身の回りの世話をおもに行っていたのは、祖母であるDと同世帯に暮らす三女である。とくに農繁期や集合的年中仏教儀礼、安居期の持戒行がある際には、田植えや稲刈りなどの農作業や儀礼の準備・片付け、儀礼当日の参加をするのはDであり、Dがいない間は三女が四男の長女の身の回りの世話全般を行っていた。ただし睡眠時は必ず祖母であるDが孫と添い寝し、三女は夫と自分の子どもたちと別の寝室で寝ていた。また祖母Dと三女以外に身の回りの世話を行っていたのは、現在は独立した世帯を構えている長女である。長女は自らの世帯の農作業や儀礼への参加、住民組織の作業などがないときには、世帯しで姪の身の回りの世話をしていた。

以上のような世帯しに対して、四男夫婦は二カ月に一度の割合で約二千バーツを仕送りしていた。さらに年末年始やタイ正月に帰省した際には、洋服やおもちや、お菓子などバンコクから大量の手土産をたずさえてくる。たとえば二〇〇五年の帰省時には、Nは手土産の他に、四千バーツ

をDに、長女には五〇〇バーツを渡していた。四男夫婦の支出入をみると、夫婦の月収は合計一万六千バーツほどで、帰省時の交通費やお土産代、世帯しや長女に手渡した金額の総計はほぼ一カ月分の給料と同額になるほどであった。

以上の事例にみられるように、実際に預かった子の世話をしているのは、村に残る「出稼ぎ」者の母親と姉妹である。ただし姉妹はあくまで協力者であり、主体的に子を預かる責任を負うのは、先に述べたようにあくまで「出稼ぎ」者の母親である。

このような子育てをめぐる大家族化の現象が可視化されていくなかで、それを引き起こす子を持つ女性の再「出稼ぎ」は、女性たちの間で二つの異なる方向へ向かう意識や評価を引き起こしている。たとえばNの「出稼ぎ」に対して、バンコクで働いた経験を持つ義理の妹は、Nの帰省時に以下のような問いを発していた。

義理の妹「こんなにお土産なんて買ってこなくていいのにお金もつたいない。これほど赤ん坊(Nの長女)と離れ離れになってまで、バンコクで働かないといけなの?」

N「ウボン(ラーチャタニー県)に帰って三人で暮ら

す家を建てるお金をはやく貯めないといけない。今戻つても、暮らしていくお金がない。母も夫も身体が強くないし、私一人で田んぼもできない。彼より私の給料の方が多いから、今のうちにたくさん稼いでおかないと。(長女と会えなくても)我慢するわ」(二〇〇五年一月一日)。

Nのように、子の生活費や学費を稼ぐために母である自分の「出稼ぎ」が不可欠であると考える人々がいるのと同じ時に、母であるがゆえに「出稼ぎ」をせずに村で子育てをするべきだと考える義理の妹のような人々もいる。前者は移動する「出稼ぎ」者自身、あるいは寡婦や離婚者を「出稼ぎ」へと送り出した家族の語りである場合が多く、とくに「出稼ぎ」経験者の寡婦や離婚者へは、母親や家族から世帯を担う稼ぎ手としての期待もよせられている。未婚者に対してこのような「出稼ぎ」への期待がほとんどみられないことを顧みると、子育ての領域を含みながらよりよい暮らしを実現するための生活手段として、「出稼ぎ」は既婚女性や子を持つ女性の選択肢として彼女らの生活に組み込まれつつあることを指摘できるだろう。一方、義理の妹のように、母親が主体的に子の側で面倒をみる責任を負うべきだという意識を明確に表す人々もいる。このように子の面倒は母親がみるべきだという意識や基準は、政策においても「出稼ぎ」で不在となる母親の子育てをめぐる問題

として取りあげられており(江藤 2009: 119)、現代タイにおけるより大きなイデオロギー的な動きとも対応している。

おわりに

最後にこれまで論じてきたことをまとめ、本稿で扱うところのマイクロ・リージョンについて考えてみたい。本稿の目的は、女性たちのライフコースのなかで「移動」を捉え、家族との関係を基盤にした移動者自身の持つ論理によって編成される地域社会のダイナミズムを明らかにすることであった。一九六〇年代以降のバンコク首都圏における労働市場の拡大は、地方農村出身女性たちを動員してタイにおける労働力の女性化を引き起こした。そのおもな送り出し地域である東北タイ農村では、それまで女性が移動することとはほとんどなかったにもかかわらず、若年女性たちがバンコク首都圏に向かうようになった。そして一九九〇年前後以降は既婚女性や子を持つ女性が、それまでの自身の経験に基づいて「稼ぎ手」として主体的に「出稼ぎ」を選択するという価値観の転換が起こってきた。ただしその場合には、労働の場であるバンコク首都圏には連れて行けない我が子の面倒を、村でみてくれる母親や姉妹の存在が不可

欠であった。つまり子を持つ女性たちの再「出稼ぎ」は、移動することで両親やキョウダイへと利益を還元する一方で、自身と同じ世帯に暮らす母や姉妹といった女性たちが存在することで可能となったのである。

本稿で試みてきたように、女性たちのライフコースのなかで「移動」を捉えると、移動者自身がライフコースのどこで移動するかを選択し、実行していくのかを明らかにすることができた。また、その移動の論理に基づいて農村地域社会さえも編成されてゆくというダイナミズムもみえてきた。同じ移動経験者でも、母として「出稼ぎ」を選択する女性としない女性がいる。その場合、従来の社会構造を基盤にし、女性間で協力し合いながら母役割の分担を行い、姉妹の再「出稼ぎ」を可能にしてきた。つまり世帯内で女性同士の関係性を再編成しながら、移動者を送り出し続けてきたのである。本稿ではその一端しか示せていないが、マクロな政治経済構造に包摂されながらも、家族の構造を共有する場のなかで支えられてきた移動の論理に基づいて日常的な行為を通じた関係性の再編成を行ってきたからこそ、東北タイ農村では約四〇年もの間、女性労働者をグローバル労働市場へ送り続けることができたのだといえよう。以上のような地域の生成をミクロ・リージョンとして意識できるのである。

最後に、東北タイ農村の移動者をめぐるミクロ・リー

ジョンは、今後大きく再編され続けていくだろう。子を持つ女性の再「出稼ぎ」を支えてきた妻方居住に基づく家族形態は、「姉妹の誰かが村の世帯に残る」という理想的な家族周期のなかで維持されてきたものである。ただし今後、移動の先行者による恩恵を受け、先行者よりも高い学歴を得て、よりよい仕事を選択している世代が、帰郷を前提とする「出稼ぎ」を選択するかどうかは定かではない。たとえばC村の年齢別人口構成をみると、現在二〇代以下の世代が少子化世代でもあることがわかる。少子化世代の人々がこぞって高校や大学を卒業し、都市部で働き始めるようになった今、「姉妹の誰かが村に残る」というこれまでの理念型を東北タイ農村の人々はどうのように維持、あるいは変化させていくのだろうか。その点を移動者の視点に基づいたミクロ・リージョンを通して明らかにしていくことが、地域研究に求められる視座であろう。

●注

*1 本稿では、「一定期間、村を離れて現金獲得活動を行った後、再び村に帰郷する」という行為を「出稼ぎ」と記す。いうまでもなく出稼ぎは、昭和三〇年代の東日本の農村の状況から生み出された分析概念である(大川 1976)。東北タイ農村の状況は日本の出稼ぎときわめて類似しているが、歴史文化的文脈における相違点もみられるため、本稿ではこれを便宜的に「出稼ぎ」と記す。

*2 言語学的分類(李方桂の三分法)によると、ラオはタイ・

カタイ系諸語カム・タイ語群チュワン・タイ語群のなかの、南西タイ諸語を話す人々である(三谷 1984: 65-66)。現在ラオの人々は、おもにメコン中流から下流にかけて、タイ東北部とラオス人民共和国の一部、カンボジア王国の一部に居住している。

*3 一四世紀にラオによって仏教王権国家ラーンサーン王国が建設されたが、度重なる王国の分裂などによる内紛から逃れた人々が、同地に徐々に南下してきたものと考えられている(Toen 1970)。

*4 東北タイ農村から首都周辺への移動の歴史は、ラーマ五世時代(一八六八―一九一〇年)前後に遡る。まずボウリング条約(一八五五年)を機に、輸出米生産地として開拓され始めたチャオプラヤー河流域へ開拓者として移住する者がいた。また鉄道路線の開設を背景に、コラートの中継点として各地の精米所へ働きに出たり、牛や水牛販売を目的とした行商人が、東北タイと中央タイとを行き来したりするようになった。中央側の記録では、こうした人々はラオであったと記されている(Thawin 1982: 57-59)。同様に東北タイの側でも、現金獲得のための移住や移動を積極的に行うのはラオの人々であると考えられていた。林によると、同地の非ラオである先住者は、ラオについて移動を好み、「自給自足の社会生活を足場にして、さらなる富を得る活動(土地転がしや行商)に長じようとした人々」である、と捉えていた(林 2000: 80)。

*5 たとえば、自給用の米不足に際して夫婦やキョウダイ、近親者などで米を求めて村々を渡り歩く行為などがある(林

2000: 116)。

*6 定着調査では、おもにC村の世帯構成員や経済状況に関する全戸調査、農村社会の一般的情報に関する参与観察や聞き取り調査、移動労働に関する聞き取り調査を行った。調査は、筆者が標準タイ語と東北タイ方言を使用して実施した。また本調査は、国際交流基金・平成一五年度アジア次世代フェロシップ・プログラムの支援を得て可能となった。

*7 二〇〇五年現在、一バーツは二―三円であった。また、C村住民の平均支出は約三千バーツ/月であった。

●参考文献

- 江藤双恵(1996)『ジェンダーと家計貢献——現代タイ農村の実態から』関啓子、本喜美子編『ジェンダーから世界を読む』明石書店、一四八―一七三頁。
- (2009)「タイにおける『子育て支援』政策の現状と課題——『子ども開発』と『家族制度開発』を中心に」『年報タイ研究』九号、一一三―一四〇頁。
- 大川健嗣(1979)『戦後日本資本主義と農業——出稼ぎ労働の特質と構造分析』御茶ノ水書房。
- 木曾恵子(2007)「東北タイ農村における移動労働と女性をめぐる規範——一九七〇年代以降の女性の移動労働の展開を通して」『年報タイ研究』七号、五五―七八頁。
- 竹内隆夫(2009)「バーンと家族——タイ家族の基層を求めて」『立命館国際研究』二二巻三号、一八一―二〇四頁。
- 林行夫(2000)『ラオ人社会の宗教と文化変容——東北タイの地域・宗教社会誌』京都大学学術出版会。

三谷恭之 (1984) 「東南アジア諸言語の系譜」 大林太良編 『東南アジアの民族と歴史』 民族の世界史六、山川出版社、五八一～七六頁。

水野浩一 (1981) 『タイ農村の社会組織』 創文社。

渡辺真知子 (1988) 「タイの経済発展と国内移動——一九七〇年代の変化を中心として」 『トビエ経済』 二九卷二号、二一五～四七頁。

Adul Wichiencharoen (1960) Movements of Population within Thailand. *Journal of Public Administration* 1: 225-232. Bangkok: Thammasat University.

Heyzer, Noleen (1986) *Working Women in South-East Asia: Development, Subordination and Emancipation*. Philadelphia: Open University Press.

Keyes, Charles F. (1966) Ethnic Identity and Loyalty of Villagers in Northeastern Thailand. *Asian Survey* 6(7): 362-369.

—— (1984) Mother or Mistress but Never a Monk: Buddhist Notions of Female Gender in Rural Thailand. *American Ethnologist* 11(2): 223-241.

Kirsch, A. Thomas (1966) Development and Mobility among the Phu Thai of Northeast Thailand. *Asian Survey* 6: 370-378.

Meinkoth, Marian R. (1962) Migration in Thailand with Particular Reference to the Northeast. *Economic and Business Bulletin* 14(4): 3-45.

Muecke, Majorie A. (1984) Make Money not Babies: Changing Status Markers of Northern Thai Women. *Asian Survey* 24:

459-470.

Mills, Mary Beth (1999) *Thai Women in the Global Labor Force: Consuming Desires, Contested Selves*. New Brunswick: Rutgers University Press.

Parnwell, Michael (1986) *Migration and the Development of Agriculture: A Case Study of Northeast Thailand*. Hull: Center for Southeast Asian Studies, University of Hull.

Parreñas, Rhacel S. (2005) *Children of Globalization: Transnational Families and Gendered Woes*. Stanford: Stanford University Press.

Pasuk Phongpatchit (1982) *From Peasant Girls to Bangkok Masses*. Geneva: International Labour Office.

Patcharin Lapanun, Dararat Mettarianand and Yaowalak Apichatvullop (2007) Kan taengnan kham wathanatham: Kan suksa sathanaphap ongkhwamru. Khon Kaen: Center for Research on Plurality in the Mekong Region (CERP), Khon Kaen University. [『タイを愛する地域』]

Pawadee Tongdai (1982) Women, Migration and Employment: A Study of Migrant Workers in Bangkok. Ph. dissertation.

Sammakngan Sathiti haeng Chart, Samnak Nayokrathamontiri (2000) *Sammako Prachakon lee Kheha pho. so. 2543*. Bangkok: Sammakngan Sathiti haeng Chart, Samnak Nayokrathamontiri. (『11000サタヘ国人口ヤサヘ』)

Suwanlee Piampiti (1984) Female Migration in Bangkok. Gavin W. Jones (ed.), *Women in the Urban and Industrial*

- Workforce Southeast Asia*. Canberra: Australian National University, pp. 227-246.
- Tambiah, Stanley J. (1970) *Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Textor, Robert B. (1961) *From Peasant to Pedicab Driver: A Social Study of Northeastern Thai Farmers Who Periodically Migrated to Bangkok and Became Pedicab Drivers*. New Haven: Southeast Asian Studies, Yale University.
- Thawisin Supwattana (1982) Kan khluanyai Raengngan Isan khao su suan klang nai adit. *Wasoran Thammasat* 11(3): 56-65. (「東北地方から首都中央への移動労働史」)
- Toem Wiphakphotchanakit (1970) *Praewattisat Isan*. Krung-thep: Mahawitayalai Thammasat. (『ヤカーンS歴史』)
- Walker, Andrew (1999) *The Legend of the Golden Boat: Regulation, Trade and Traders in the Borderlands of Laos, Thailand, China and Burma*. Honolulu: University of Hawaii Press.

(きんぎょ けいこ)／東北大学東北アジア研究センター